



# 世界中の電気化学会

末永 智一

平成26年度の会長を仰せつかることになりました。身の引き締まる思いです。

本会は、昨年、創立80周年という節目を迎えました。記念大会の実行委員長だったこともあり、本会の歴代の会長、副会長の方々のリストを拝見する機会がありましたが、いろいろな書物に書かれているような高名な先生方や日本を代表する企業の社長や幹部の方々の名前が記載されていました。電気化学会が、日本の学問や基盤技術を支える学会として、重要な役割を果たしてきたことがよく分かります。そのような歴史のある学会の会長に就任するとは、私は全く想定しておりませんでした。これまで諸先輩方が築いてこられました伝統を継承し、次の世代に引き継ぐことが私の役割と感じています。

電気化学会は、これまで米国を中心とした Electrochemical Society (ECS), ヨーロッパを中心とした International Society of Electrochemistry (ISE) と連携・協力しながら世界の電気化学の発展に大きく寄与してきました。日本人は、一般に、私も含めてどちらかというと謙虚で目立つことを嫌うような傾向があります。バブル崩壊以前は、各方面での日本の進出が目覚ましく、ECSやISEが主催する国際会議でもアジアからの参加者のほとんどは日本人ということが多く、特に意識しなくとも日本人研究者はそれなりに目立っていました。しかし、最近の国際会議では、中国、韓国、台湾などの東アジアの研究者だけではなく、東南アジアからの参加も多くなっており、日本人研究者の存在感が以前に比べ薄れていると感じます。会員の中には、国際学会に参加した際に中国語で話しかけられた、という経験をした方もいるのではないのでしょうか。学会の会場で活発に質問をしているアジア系の参加者には中国や韓国の研究者が多いと感じるのは私だけでは無いと思います。このような中で、ECS会長に早稲田大学の逢坂先生が選出されましたことは、日本人として大きな誇りを感じます。

私はここ4年間 ISE の Tajima 賞 (40才までの中堅、若手研究者を対象) の選考委員長をしていました。欧米だけでなくアジア諸国からもたくさんの応募があり、中には直接私に問い合わせってくる応募者もいました。日本の研究者に積極的な応募を勧めましたが、残念ながら応募はほとんど無く寂しい思いをしました。電気化学会会員の皆様には、電気化学会の各賞だけではなく、ECSやISEなど電気化学会と密接に連携している海外学会の賞にも積極的に応募頂きたいとします。

電気化学に限らずいろいろの学問分野はますますグローバル化しています。電気化学会は、これからも ECS, ISE だけでなく中国、韓国をはじめとするアジアの関連学会と密接に協力しながら、世界の電気化学の発展に寄与する大きな責任があります。この点で、これからの日本の電気化学を支える若い方々の活躍に大きく期待しています。海外の学会等での日本の若手研究者の講演は、研究レベルが非常に高いにもかかわらず一般的にちょっと控えめと感じます。講演の中では自身の研究を積極的にアピールしましょう。また、他人の研究を紹介する場合でも同じ分野の日本人の研究を紹介してはいかがでしょうか。日本の電気化学会を代表している、という意識を頭の片隅で置いていただき、他国の研究者や技術者に注目され、いい意味で目立っていただきたいと考えております。



Tomokazu MATSUE  
本会2014年度会長  
東北大学原子分子材料科学  
高等研究機構  
教授